緩和医療・在宅医療を支援する薬剤師

神奈川県大和市・雙葉薬局薬局長　加藤　久幸

―過去・現在・未来―

▽2

前回は、医薬分業が進展すると共に、その必然性から少しずつ薬剤師が在宅医療に取り組み始めたことを記載しました。しかし、その姿は必ずしも患者やその家族から、薬剤師の職能を必要不可欠として求められた形で浸透したというよりも、医師や看護師から「ぜひ手伝ってほしい」と促されるように進み始めたような形態ともいえます。

しかし、その一方で薬剤師の必要性は、着実に認められてきたことも事実でした。例えば製剤学の知識は、他の医療職が習得していない、言い換えると薬剤師の独占分野であり、薬剤師が最も専門とする領域です。

そこで今回は、現在、在宅医療で活躍する薬局薬剤師の現状をご紹介すると共に、海外の薬局薬剤師がどのように活躍しているのかを、薬学生の皆さんに紹介したいと思います。

コペンハーゲン市内にある薬局（一包化を専門に行っている製剤室の様子）

多職種連携が今は基本

在宅医療で最も薬剤師が求められるのは、薬剤管理です。薬剤師が訪問を開始する時に発見される問題点は「薬剤の保管状況」（約60%）、「服用薬剤の理解不足」（約40%）、薬剤ののみ忘れ（約35%）が最も多い問題点です。

図１は、これらの問題点を患者の能力に応じて管理している実例です。このように、患者の状態は多様ですから、１人ひとりの理解力、状態に合わせた対応が薬剤師にも求められます。

次に、多種多様な薬剤の使用や、高齢で生理的な機能が低下したことで引き起こされるイベントモニタリングについてです。一例を挙げますと、高齢な患者さんが多剤服用されていていました（16種類）。最近、排尿に問題があることが分かりましたので、薬剤師は使用している薬剤の中から、抗コリン作用のある医薬品が引き起こしている副作用ではないかと考え、医師と相談の上、対象となる薬剤の服用を中止することで改善へ向かったことがあります。

このようなケースは、薬剤師単独で問題点を発見することもありますが、在宅医療にかかわる看護師や介護士など、他の職種との情報の連携によってもたらされることもあります。最近では、多職種による連携を目指した活動の中に、薬剤師がかかわることも多くなって、成果を少しずつあげるようになってきました。このような多職種連携による在宅医療は、各職種の異なる視点（専門性）が必要ですから、その背景となる学問が求められます。とりわけ薬剤師は、最終的に処方医へ情報をフィードバックして処方設計の支援（剤形、用法、薬剤選択など）にかかわる機会が増えてきます。

図１

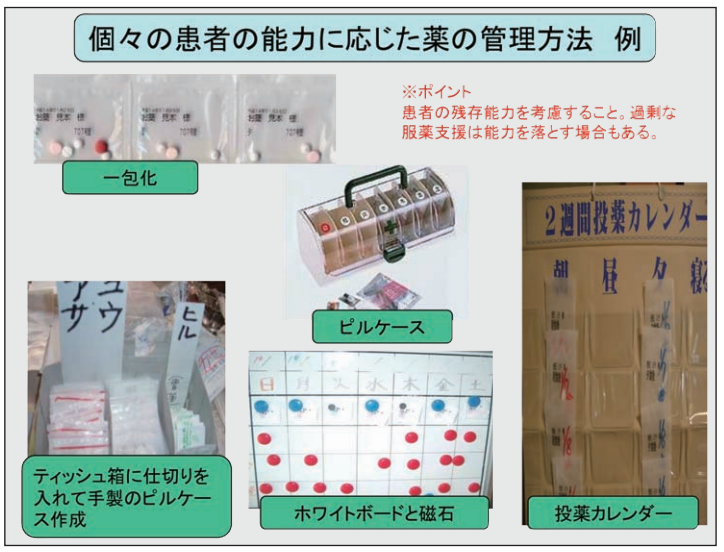
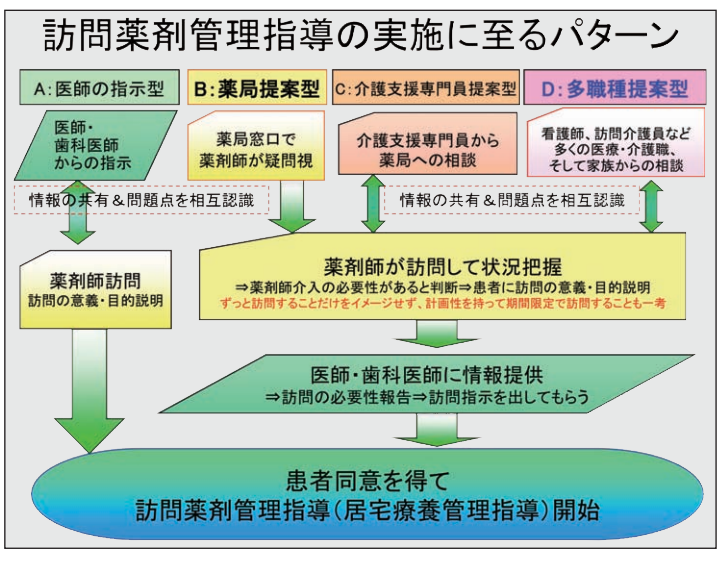


図２



現在、日本の薬局薬剤師が在宅医療にかかわるようになる、実施に至るパターンを図２に示します。

地域全体で取組む課題

10年前までは、医師の指示型が多かったように思われます。しかし、最近では薬局提案型から多職種提案型が増えてきました。これは在宅医療はキュアではなくてケアを求めた医療形態であって、薬剤師もそのケアを支援する職種として必要不可欠になってきた証です。また、在宅医療は患者の住む地域全体で支える医療という形態であることもその特徴として挙げられます。ですから、医師も訪問看護ステーションの看護師も、介護士も特定の施設と特定の薬局がかかわるのではなくて、不特定多数の施設の職種がかかわりながら１人の患者を支援するのが、在宅医療を推し進めるためには必要ということを、薬学生の皆さんにも理解してほしいところです。

では、高福祉国家とされる北欧の薬局は、どのように在宅にかかわっているのかを少し紹介しましょう。例えば私が視察したデンマークでは、急性期は病院において入院治療を受け、在宅治療に移行する場合、ナーシングホームという施設が短期的に患者を受け入れ、その後、自宅療養へ移ることになります。そこでは主に、看護師や介護職員が主体的に仕事をしています。

日本とは違い、ナーシングホームや患者宅へ薬剤師が赴き服薬指導するシステムはありませんでした。しかし、薬剤師は次のようなシステムで医薬品適正使用、管理にかかわっていました。一包化など製剤が必要な調剤業務は、できる限り集約化した基幹薬局が行っています。このようなシステムはコストの軽減のためにも必要だと考えられます。

また、在宅介護やナーシングホームでの医薬品の使用方法改善を目的に、多剤を服用している患者に対して医薬品使用をより最適化するため、在宅介護やナーシングホームで働く介護者の全般的な能力向上に向けた教材を薬剤師が開発し、さらに患者の治療における薬剤関連の問題を把握、評価・解決するため、在宅介護、ナーシングホーム、薬剤師・医師の連携モデルを構築していました。

ハワイでは1983年に、ＨＩＴ（Home Infusion Therapy＝家庭における高カロリー輸液療法）を提供する薬局が現れました。患者は退院前から医師、ホームケア・ナース、薬剤師などから構成される医療チームによって、１人ひとりの治療プランが立てられ、患者とその家族たちに退院後の治療方法、器具の使用方法について分かりやすく指導しています。あらゆる年齢の患者は、病院から自宅に戻り、病院と同じ療法のサービスを受けることができます。

OTC DRUG Searcher
DVD版・CD版　定価 5,250 円(税込)
メンテナンス１回 1,050 円(税込)
※DVD版（１枚）／CD版（６枚組み）の内容は同じです。　※Windows Vista、XP対応
※メンテナンスは月１回。ご希望時に購入できます。
薬事日報社　注文専用 FAX　03-3866-8408